

航空評論家(元 日本航空機長)

小林 宏之

世界の空港や空路と 社会の発展

Profile
こばやし・ひろゆき
1968年日本航空に入社。日本のフラッグキャリアの機長として、40年以上、累計1万8,500時間を飛行し、「グレートキャプテン」の異名を取る。竹下登、海部俊樹、小泉純一郎の3首相の首相特別便機長や、湾岸危機時の邦人救出機機長も務めた。著書に『ザ・グレート・フライト JALを飛んだ42年』(講談社)、『航空安全とパイロットの危機管理』(成山堂書店)など。

文化・文明・経済は 交通の要所で発展してきた

昔から交通の要所で、文化・文明・経済が発達・発展してきたことは、歴史がよく証明している。陸路の代表的な例としては、シルクロードの要所の都市や街の多くが歴史の証人だ。海路では、水の都市国家のベニスがあり、かつて七つの海を制した大英帝国が開いたシンガポール、香港などもある。

陸路や海路と比べて、空港・空路の歴史は非常に浅い。しかし、その発展の速度は、陸路や海路より桁違いに速い。あたかも、人や馬の歩く速さや船の

初代大統領・副大統領から名前を取ったスカルノハタ空港。
昨年、新しいターミナルが完成した



速度、飛行機の速度が違うかのように。

空港・空路に驚異的な発展速度をもたらす要因の筆頭には、技術の進歩が挙げられる。それを後押しするものとして、社会・経済の発展やグローバル化など、さまざまな要因が相まっているのではなからうか。空港・空路は、ヒト、モノ、文化、情報を運ぶ手段として、現代ではその主役を担っている。

空港・空路の発展は 社会・経済の発展と比例

私は、1970年から2010年まで、航空会社のパイロットとして世界中の空路と空港を見てき

発展に伴い、空港も近代化するとともに、匂いもグローバル化した。というよりも、匂いというものを体感できなくなってしまう、味気ない気もする。

空路は国際情勢の影響を リアルタイムで受ける

空港につながる空路も、航空機の数、航空便の増大に比例して凄まじい勢いで増大、拡大、複雑化してきている。空路は陸路が線、海路が面であるのに対して立体的であり、かつ高速移動を前提していることに特殊性がある。航空機同士の空中衝突を防ぐために、縦方向、横方向、前後の間隔を一定以上維持しなければならないのだ。にもかかわらず、航空路の数を増大し空路自身の間隔を狭くしても衝突事故がほとんどなくなったことには、航空機の航法に

どの著しい発展を続けているのがドバイだ。瞬く間に中東のハブ空港の役割を担うようになったドバイ空港の豪華な装いは、観光、ビジネスなどで航空便を利用する人々の多くに強い印象を残すところだ。

私は、海外の65の空港に降り立ち、南極上空以外ほぼ世界中の空路を飛行してきた。経済発展に比例して発展してきた空港の一例を挙げると、インドネシアの首都ジャカルタの空港がある。1970年代、私がまだ副操縦士の時代は、施設も貧弱で、夜には照明も暗いクマヨラン空港が首都の玄関口だった。当時の空港ビルの屋上には、見物の人々が黒山のように集まっていた。その後、1980年代前半になり、私が機長としてジャカルタに勤務するころはハリム空港になっていたが、施設などはクマヨラン空港より少し改善された程度だった。その後、インドネシア経済の急速な発展に伴い、近代的なスカルノハタ空港が新設された。広大な空港だったが、さらなる需要増に対応するため、今も滑走路、空港ターミナルなどの施設増強が続いている。ジャカルタを具体例として示したが、他の東アジア、中国、韓国の首都圏空港、大都市空港の発展は、どれもよく似ている。



国連安保理決議により空域が封鎖された中でのフライトに使った航空路チャート

活用されるGPS、航空管制技術の進歩など、技術革新が大きく寄与している。空路も基本的には各国の社会的には各国の社会・経済の発展とともに成長するものだが、経済に関係なくある国の航空機が別の国の上空を通過するだけのケースもある。



機長時代の筆者

もう一つ、空路の特徴として、政治や外交などの国際情勢からダイレクトに影響を受ける点がある。田中角栄首相と周恩来首相との間で日中が国交回復した翌日から、日本の航空機が台湾の空域を飛行できなくなり、香港から羽田に戻るときには、フィリピンの空域まで迂回して帰ることになった。南ベトナムのサイゴンが陥落したときも、ベトナムの上空を飛行することができなくなり、シンガポールの空域まで大きく迂回して羽田に戻ってきた。湾岸戦争直前の湾岸危機では、イラクに人質になった邦人の救出フライトを任せられ、国連安全保障理事会の議決によるイラクに対する空域封鎖の中を、強制着陸させられて臨検を受けた場合のことも想定してフライトを実施した。これらは全て、国際情勢が空路にそのまま影響を与えることを、私が身をもって体験したいいくつかの例だ。

社会・経済とともに発展する反面、国際情勢からリアルタイムで影響を受ける——これは、空港や空路特有の事情といえるだろう。

※「Voice」の内容は、筆者の個人的見解に基づいています。